

はしがき——「放送と都市」という問題設定

二〇二五年、日本で放送が開始して一〇〇年が経つた。この間、ラジオとテレビはわれわれの生活のなかに深く分け入ってきた。ラジオを聴き、テレビを観るということは、日常生活の一部となつた。これは、人類が手にした新しい経験であつたと思う。なぜなら、放送を通じて人びとは、巨大な共同体を築きあげたからである。全国に張りめぐらされた放送網（ネットワーク）によつて、人びとは連帯をもつことができるようになつた。同じ時刻に、見知らぬ誰かと情報を共有するという感覚が、われわれに、共、幻、想、をもたらしたのである。

見ず知らずの者同士がつながり、協力するという経験は、言うまでもなく、「言語」の誕生まで遡る。宗教や法、国家が生まれたのは「言語」によるネットワークのおかげである。ユヴァル・ノア・ハラリが言うように、これはホモ・サピエンスの勝利であつた（Harari 2015）。ただ、言語で形成された小集団を、マスの集団へと押し上げ、知らない者同士がつながる巨大な連帯となるためには、もう少し技術の開発が必要だつた。

とくに活版印刷術の発明は、明らかに共同体の規模を広げた。メディア論の古典、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』には、近代以降、出版資本主義の登場によつて「想像の共同体」が生まれたことが綴られていく。たとえお互いのことを知らなくても、出版によって読者たちがつながり、人びとの間で想像された、国民やナショナリズムが誕生したのである（Anderson 1991）。この共同体論の延長線上に「放送」を位置づけなければならぬ。出版技術以上に「放送」は、大量の人びとを即時のにつなげる媒体となつたからである。夥しい人びとが同じ情報を同時に共有できるようになったことは、さらなる共同幻想を生むきつかけとなつた。その意味で、「放送」とは人類が手にした新しい装置であつた。

この共同幻想の先に築かれたのが、「都市」という共同体だったのではないか。放送の誕生以後、人びとは新たな都市感覚を手に入れた。放送によつて「都市」という想像的な共同体を意識するようになつた。かつて都市とは、範囲が見えるものだつた。時計台や城壁、城館のファサード、記念碑、彫刻などを通じ、その範囲を知ることができた (Mumford 1961)。しかし、現代都市になると、人口流入や情報集積によつて、都市の輪郭は曖昧になつた。都市は「見えない都市」になつたのである (磯崎「一九六七」二〇一三)。

このとき「放送」という装置は、現代都市の輪郭を見定める重要な役割を果たすようになつた。「放送」は都市という茫漠とした共同体を、電波を通じて想像させる手段となつたのである。これを「放送都市」と呼んでもいい。放送が誕生し、さらなる「想像の共同体」が広がつたとき、放送は都市を枠づける装置となり、新しい共同体を生み出す媒介者となつたのである。実際、ポール・ヴィリリオも「テレビ・都市」という言葉でこれを表現している (Vittorio 1996)。放送とはわれわれの想像を支え、共同幻想をもたらし、現代都市を存立させる新しい技術となつたのである。これは人類史にとっても、再考しなければいけない重要なテーマである。

さて、二〇二五年、放送は一〇〇年を迎えた。放送は巨大産業に成長し、いまや衰退が叫ばれる存在になつた。しかし、この一〇〇年間、放送は都市をどのように映し、枠づけてきたのだろうか。戦前から戦後にかけての放送史を、改めて見直さなければならないだろう。本書は、日本の放送に限定し、この「放送」と「都市」の関係史を探つていきたい。もちろん、いまはインターネットやSNSが、新しい共同幻想を生み出している。しかし、それを考える前に、放送と都市の一〇〇年の歩みを振りかえることが必要である。放送の世紀は、いかなる共同体を築きあげ、われわれの国土觀を支えてきたのか。一〇〇年経つたいまこそ、検証しなければならない。

本書は3部構成となつてゐる。第一部「戦前の「放送と都市」」(第1章～第3章)では、一九二〇年代のラジオの誕生以降、拡がる「同時性」空間を論していく。ラジオによつて、どのように人びとの都市経験がつながつていったのか。帝都・東京から全国へと拡がつていく放送網の過程を明らかにしながら、各都市空間にアンテナ塔が

林立したことの意味についても検討する。そして国内にとどまらず、大東亜共栄圏という旗印のもと、南方へも「同時性」空間が拡がった事実も言及したい。これが戦前の「放送」と「都市」の関係の始まりであった。

第二部「放送と都市」の戦後（第4章～第7章）では、戦後、ラジオからテレビへと重心が移っていくなかで、テレビと都市の関係を取り上げる。テレビの普及率が一気に増加し、その影響力が増すなかで、テレビは東京をオリンピック都市へと変えていく。その一方で、高度成長期以降、テレビは地方で闘う「人」への注目を始める。ここでテレビの都市への向き合い方が変わり、当時の象徴的な地―大潟村と水俣を見ればよくわかる。テレビは「地方の時代」と連動しながら、都鄙の葛藤を描いていったのである。

第三部「放送と都市」のゆくえ（第8章～第10章）では、二〇一一年に起きた東日本大震災をめぐり、テレビが被災地をいかに伝え、震災地図を描いたかを検証する。これはSNSが爆発的に普及する前の、最後の「放送と都市」の関係図であったと言つていい。さらに、テレビが外部世界を描くとはどういうことか、都市や国土との関わりを改めて番組史から辿る。そして、本書の最後では、これから放送研究を考えるために、「放送と都市」を読み解くことの意義をまとめみたい。

以上のように、本書で明らかにしていくのは、放送一〇〇年の歩みのなかで、いかにラジオとテレビが共同体を編んできたかということである。もちろん、すべての都市や事象を取り上げることはできない。しかし、これから放送というメディアとは何だつかを検証していくなければならないわれわれにとって、「放送と都市」という問題設定は、一つの視角になるはずだ。